

大きなおもちゃで夢中になって遊ぶ子どもたち
＝いずれも安城市安城町の市民ギャラリーで



動きや音を楽しむ「木のおもちゃ展」が、安城市安城町の安城市民ギャラリーで開かれている。愛知教育大教授で木のおもちゃデザイナーの樋口一成さん(54)＝写真＝が考案し、長野県根羽村の森林組合が地元のヒノキやスギで作った独創的な大型おもちゃなど60点以上が並ぶ。24日まで。(四方さつき)

高さ三メートルのタワーや長さ二メートルのスロープなどに、木の球のほか、ドーナツやラグビーボールなどの形のこまを転がすおもちゃがあり、自由に遊ぶことができる。



愛教大・樋口教授が考案 安城で展示

会場にはのこぎりやテープカッター、金づちなどの形をした七台の木の本棚も置かれ、遊び疲れて寝そべる子どもたちもいた。観覧料三百円(中学生以下無料)。

会場にはのこぎりやテープカッター、金づちなどの形をした七台の木の本棚も置かれ、遊び疲れて寝そべる子どもたちもいた。観覧料三百円(中学生以下無料)。

二〇一四年、岡崎市での個展をきっかけに、安城市ともゆかりの深い根羽村森林組合とつながりができ、共同で製作するようになった。樋口さんは「木の香りと手触りを楽しみながら、自然環境に関心を持つことにつながる。何度も繰り返し遊ぶことで集中力も養われる」と話す。

場には多くの親子連れが訪れ、小さな子どもたちが、こまがカタカタと素早く落ちたり、ユラユラと動いたりする様子を興味深そうに見つめていた。

豊田市広田町の田淵恵子さんは長男功芽ちゃん(三)と訪れ「夢中になって遊んでいる。大人も楽しめるのがいい」とにつこり。高齢の夫妻は「傾斜を変えると動きや速さが変わるものもあるので、飽きない」と何度も挑戦していた。

美術教育や幼児教育が専門の樋口さんがおもちゃ作りを始めたのは、大学院生だった一九八八年。さまざまな形の坂道やタワーを作り、こまを転がしたり落としたりしながら試行錯誤を重ね、面白い動きをしたり音が鳴ったりするように、スロープの構造やこまの形状を工夫してきた。

五感で楽しむ木のおもちゃ